

## 古代紫

古代紫 (RGB 127, 17, 184)

古代紫という色を知っていますか。澄んだ赤みの紫です。英語ではロイヤルパープル（王者の紫）といわれ、born in purple といえば「高貴な家柄に生まれた」という意味です。昔は王や最高位の僧侶と政治家にのみ着衣が許されていました。日本でも昔は天皇だけがこの色の衣を召していた時代があります。高貴な色です。

この紫染料はアクキガイという 10 cmほどの貝 12,000 個からわずか 1.5 g だけ採れ、これを白布につけて日光にさらすと、徐々に黄色から紫紅色に染まります。だから大変高価だったわけです。衣ひとつが何百万円もしたことでしょう。使徒や庶民が(無染色の)白服ばかりというのも納得いきます。

エジプトの女王クレオパトラ7世の旗艦の帆がこの紫で染められていたというのは有名な話で、国力を示すのに十分な話です。



映画「ベンハー」 部下の白服(無染色)と支配者の紫の衣服  
<http://www.youtube.com/watch?v=fFr8C34v-q8>

イエスが十字架刑の判決を受けたあとの場面に紫の衣が出てきます。「イエスに紫の衣を着せいばらの冠を編んでかぶらせ-----葦の棒でその頭をたたき、つばきをかけ-----こうして、イエスを嘲笑した挙句、紫の衣をはぎとり、元の衣を着せた。それから彼らはイエスを十字架にかけるために引き出した」(マルコ 15・16-20)

ところがマタイ福音書ではこれが「赤い外套」となっています。「その上着を脱がせて、赤い外套を

着せ、またいばらで冠を編んでその頭にかぶらせ-----」(マタイ 27・28-29)  
ふたつの記述は「色」が違っています。

キリストには紫の高貴の衣がふさわしいのですが、「罪人」とされた者が紫の衣を着ることは実際にはできなかったはずですが。仮にそうだったとしても、それを着たものを嘲ったり、つばきをかけたりする行為はありえないことです。イエスは赤い衣を着せられていたのでしょうか。

紫のことからこんな聖書の見方ができます。